

ふみの会 ニュース

■発行 ぶみの会広報部
■発行日 2005年12月30日
■連絡先 藤川博樹
〒115-0045
北区赤羽1-48-3ドミール藤203
tel03-52495797 fax03-3901-6090
■編集 中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

No.289

1月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5枚（2000字）
小説：10枚（4000字）目安

■例会
1月20日（金）16：00
四ツ谷地域センター 11F
地下鉄丸の内線
新宿御苑下車徒歩5分



ジャパン・バードフェスティバルの
売店で鳥土鈴の隣りで売っていた、
紙粘土製の小鳥のディスプレイ
（一辺が約6センチ）

ブックレビュー ダンテ「神曲／地獄篇」

寿岳文章訳・集英社文庫

格調高いイタリア文学の古典。
長編叙事詩なので読みにくいのは
ではないかという先入観は読み
始めるとともに吹き飛ばされた。
遠い西洋の遠い過去の代表的な
古典（西暦1300年イタリア）であるのに内容が生々しく感じられる
からである。

主人公ダンテが、暗い森の中で迷い、地獄へ下っていく話なのだが、
その地獄が上層から下層まで、きわめて構造的・幾何学的に描かれて
いて、このあたりは西洋的である。日本の「三途の川」は渡る場所が3
カ所あるそうだが、日本の地獄もここまで立体的、精密な構造はして
いない。そして、生前犯した罪によって、ことごとまかに落ちる場所が決
まっています、責め苦も異なるのである。

ダンテはフィレンツェにおける党派の政争に破れ、市を追放され、後
半は流浪の中におくったそうだが、政治的、宗教的な争いの中で経
験したさまざまな不正義、裏切り、略奪、敵対行為を厳しく糾弾し、
同時代の人間が地獄の中で責められる様が描かれている。それは、た
とえていうならば、郵政民営化に反対して刺客を送られ、自民党を離
党した政治家が、後の放浪生活の中で小説を書き、その中に、責め苦
に苦しむ小泉首相や武部幹事長を描いて溜飲を下げているかのよう
な生々しさである。

同時代の人間だけでなく、過去の歴史上の人物も次々と裁かれる。
ギリシヤやローマの歴史上の人物、キリスト教世界の作品から多くが
引用されているのだが、まあ、日本に移すと織田信長がその残虐・虐
殺・皆殺しの罪で裁かれ、明智光秀が主君への裏切りで裁かれ、陸軍
大将松井石根が南京大虐殺を断罪され、トルーマンが原爆投下を糾
弾され、平家がその驕慢さゆえに滅びたことを哀れまれているよう
なものである。

イタリア文学最大の古典といわれる作品もその成立の裏には生々
しい作者の感情的裏付けがあり、その内容は、同時代の人にとっては
親しみ易いものであったと想像できる。文学作品の創造の瞬間には人
間的な業火が燃え盛っている。(F)



おれたちの村

⑫

蒲原ユミニ子

10 温泉ゆき

空が高く澄んできた。

陽平は校庭でサッカーをしていた。学童に通っている泉もいっしょだ。学童は校庭の山側に建っているので、時間を合わせればいっしょに遊べる。

シュート！

のつもりが、ゴールの枠に当たりボールがどんどん通学路の方へ転がっていった。陽平が取りに走ると、ちょうど圭子が通りかかり拾ってくれた。陽平は、

「サンキュ」

と言った。いつもなら、圭子は「気をつけてね」などと言いつ返すのに、だまったままだった。それに、いつもは何人かの女子と元気よく笑いながら帰るのに、きょうはひとりであっつむきながら歩いて行く。

（どうしたのかな？）と、首をかしげながらもどつていくと、泉がぼそつと言った。

「あいつ、女たち全員にシカトされてるんだぜ」

「ええっ！」

「学童の女の子たち、圭子ちゃんのこと、すぐけなしてた」

陽平はおどろいた。女子で一番元気で成績も一番の圭子が仲間はずれにされているとは信じられない。そういえば、このごろの圭子はさびしそうで元気がなかった。圭子はしつかりしているし、地悪でもないのに、陽平には原因が思い浮かばない。

「どうして？」

「いばってるから、いやなんだって」

「ふうん」

ヒロキが遠くで叫んだ。

「はやく、ボールをけとばせよっ！」

夕方、陽平は泉といっしょに帰った。陽平は学童に通っているケントを連れ、泉は妹を連れていく。

門の所で桜田先生に会った。先生は陽平たちを見ると、うれしそうに笑った。

「ただ今！」

みんな、どうだった？」

きょう、桜田先生は1日出張だったの



だ。それが終わってから、学校にもどって来たようである。陽平は取りあえずこたえた。

「うん、ちゃんとやっていたよ」

すると、泉が、

「圭子ちゃんが女子にシカトされた」と言ってしまった。バカ、バカ！ そんなこと先生に言うもんじゃあないと、陽平は思ったが、もう後の祭りだ。

桜田先生はやっぱりというように顔

を曇らせた。

「このごろ、元気がないと思っていたわ」

けれど、じきに笑顔を作った。

「教えてくれてありがとね」

と言って、手をふった。

それから、2・3日たった学級会に、

桜田先生が真剣な顔でみんなに言った。

「みなさんにわたしの話を聞いてもらいたいのに」

教室の空気がしんと張りつめた

桜田先生は話し始めた。

「わたしが中学生だったころの話よ。みなさんよりも少し大きくなってからね」

みんなはちよつとせずじを伸ばす。

「わたし、ある人とても嫌いなやつやたの。それでね、その人としやべらくなつたし、目も合わせなくなつた。特に、その人がわたしの意地悪したわけでもないのよ。ただ、その人の目つきが嫌だったの。いつもわたしを見ているような気がしてね。」

だから、その人が向こうからやって来ると、道を変えて遠回りしたりしたの」

桜田先生はふうっと息をついた。

「わたしは長いことそういうことを続けちゃった。その人はわたしの仕打ちにすごく傷ついたと思うけれど、何も言わなかったわ。」

わたしはその人と離れているときは、申し訳ないという気持ちでいっぱいになるのだけれど、近くにいると嫌な気持ちがむくむく湧いてきちゃったのね。そういうことをずっと続けちゃったから、わたしはその人に謝りきれないくらい悪いことをしてしまったわ」

しいんと聞いているみんなはだんだんしよぼんとしてきた。

「中学時代は思春期だから、そういう精神状態におちいりやすくもあるのだけれど・・・」

桜田先生はとても悲しそうな顔をしていて。陽平もなんだか悲しくなっちゃった。

桜田先生は気持ちを切りかえるように明るく笑顔を作った。そして、Vサインでなく、両手でスリーサインを出した。「みなさんはね、小学3年生で今はだれとでも遊べるときよ」

教室の空気がちよつとほつとした。

「なるべくたくさんの友達と遊んだりしゃべったりしてくださいね。そうすると、大人になって辛いことがあった時、子ども時代の楽しいことを思い出すと、元気を取りもどし、その辛い壁を乗り越えられるのよ」

そして、きっぱりと締めくくった。

「おたがいに、嫌なことがあったら、それを言葉で相手にきちんと伝えていくことが大切よ。だまってしまうて友だちと口をきかないのは、とてもさびしいことです」

女子はうつむいていた。圭子はりんと顔を上げ、先生の目を見つめている。

休み時間になった。

ほうつと教室中の緊張がとけている。少ししてから、女子たちが教室のすみに集まった。まん中に圭子がいる。ちょっとの沈黙のあと、ミユキが、

「ごめんね」と言った。すると、ほかの女子も小さな声で「ごめんね」と言い出した。

圭子はゆつくりうなずいた。

正夫が先生のところへ行つて聞いている。

「先生がずっと口をきかなかった人ってだれなの」

桜田先生は笑つてこたえない。そして、まずは仲直りができた女子たちのところへ近づいていった。女の子たちは照れながら先生を取りかこんだ。

桜田先生はにいつと笑つてから秘密を打ち明けるように言った。

「こんどの休みに、女子たちで温泉入りに行こうか。山もそろそろ紅葉が始まってきたけれど」

「わあっ！」

女子の歓声。

「村の共同浴場に入った後、景色のいいところでおにぎりも食べようか」

「やったあ！」

女子たちの声がそろつた。圭子の笑顔もはじけた。

すごく楽しいことだが、これは女子たちだけの話である。温泉は、女湯と男湯に分かれているもの。それに、今回の温泉行きは圭子と女子たちの仲直りの場なので、文句を言う男子はいなかった。

陽平は、(いいな、いいな。オレ女だったらよかったな)と思つたけれど。

天高く晴れわたつた日曜日、女子全員10人と桜田先生はぶらぶらと温泉まで歩き、ゆつくり温泉ときれいな秋の山を楽しんできた。

それをとやかに言う野暮な大人もいなかったようだ。

(以下次号)

混沌市凡日録 ⑩ 犬 盗 り 団

蒲原直樹

だいぶ前から世の中は変わり、暗黙の了解というものが通用しなくなつた。田んぼの米や畑の野菜、果実などは放置してあるように見えても持ち主がいる、だから取ってはいけない。昔は当たり前だったことだが、今はそれを破り大規模に盗み去るものがある。「人を見たら泥棒と思え」といういやなことわざが全面的に実現してしまつたかのような。その点ではこの混沌市も変わらない。米も子どもも放置して無事な時代は終わった。それは、ペットでも同じだ。

私立探偵の飯の種といえは浮気調査と身上調査だ。しかし最近はやたらとペット探しの依頼が増えた。混沌市困惑町の「こんとん調査社」にも続々と依頼が来て、所長の駒田隼人はびつくりした。所長といつてもこの会社にはほかに所員がいない。だから合計八匹にもなるこの犬猫探しを一人で行ななければならないのだ。平均すれば年に五・六匹だったペット探しが、この時期に固まってしまうのにはなにやら人為的な匂いがした。(まあ、調べてみりゃわかんだろ)

駒田隼人は送られてきたファックスの束を持ち上げた。そしてあらためて「なんだこりゃ」と驚いた。『ワイペット』『ビションフリーゼ』『ミニチュアピンシャー』聞いたこともない名前が並んでいる。これが犬なのだ。『エジプシアンマウ・シルバースポツテッドタビー』『ノルウェイジヤンホレストキャット・ブルーマツカレルタビー』これが猫だ。隼人には添付してある写真を見なければどんな動物なのか見当もつかなかった。見当がつくのは、これらが希少価値をもった高価な「商品」ではないか、ということだった。

(犬猫つつつたら雑種で、どこにでも転がって、みんなタダより安い駄犬駄猫だった……んな時代はとくに終わったつてか?) 駒田隼人は両手で頭の皮をかきむしった。

次の日から駒田は聞き込みに入った。まずは依頼者からの話だが、行方不明になつた犬猫たちの半数がネットで購入されたものだった。通信販売では血統書つきの動物

たちが市価の半値程度で売られているらしい。いずれのケースもオンラインで注文し、「商品」が届いてから数日して代金を振り込む、それから二週間もたないうちに購入した犬猫はいなくなつてしまつたということだ。飼い猫はベランダや庭にいたりを何者かにさらわれ、飼い犬は散歩から帰つてきたところでないくなる、というパターンが多かつた。

周辺の聞き込みを行うと、共通して作業服姿の男と黒塗りのワゴン車が目撃されていた。そのワゴン車の周囲には動物の糞尿、餌の腐つた匂い、マタタビの匂いなどの混じつた強烈な悪臭が漂つていたという。

(をーうをう、なーるほどねえ、組織的つてやつちやねえ、そりゃ行方不明が増えるはずだよ。昔は野良犬やら狂犬病の犬を駆除する『犬殺し』なんてえ商売があつたけど、こいつあいわば『犬盗り団』つうところかな?) 駒田は独語した。

ことはどうやらペット探しというよりは窃盗団の追跡で、警察に任せるべき事件になつた気がした。しかし警察に届けたとこ

ろで駒田の収入が一円も増えるわけではなかつた。実際にペットを取り返してなんぼの商売だ。

駒田隼人はしばらく作業服の男とワゴン車を追つたが、その行方はなかつたことめられなかつた。そこで彼は方向を転換し、通信販売の販売元を洗うことにした。パソコンは彼の苦手な分野だが、そんなことを言つてはいられない。インターネットで検索をかけ、依頼者たちがペットを購入したというオンライン・ペットショップを探した。カラフルなページに愛くるしい犬や猫の写真が並ぶサイトがいくつも見つかった。それらを仔細に調べると、名前は違つが製作者が同じで、似たような商品メニューの店がいくつもあった。それらは横浜・八王子・大宮・取手・船橋と、メガロポリス郊外を取り巻くように展開していた。依頼者たちの半数は、この中の三店でペットを購入していた。駒田隼人は、どうやら「犬盗り団」の本体はこの偽装したチェーン店にたとあたりをつけた。彼はこの中の混沌市に近い店に網を張ることにした。

白とピンクに塗り分けられた明るいペットショップの裏手に、窓も真つ黒に塗られた黒いワゴン車が停まったのは三日目の夕刻だった。県道の斜め向かいから双眼鏡を覗いていた駒田はあわててタバコの火を消した。ワゴン車からは目撃証言と同じ作業服姿の中年の男が降りてきていくつかの箱を下ろした。しばらくしてワゴン車は来たときと同じようにひっそりと出て行った。

駒田も一〇年ものアルトでゆつくりと後を追った。

ワゴン車は六号線を南下し、流山から草加市へ入った。茜色に染まっていた晩秋の空は真つ暗になった。やがて車は外環道に近い倉庫街の外れにあるバラックの庭に停まった。バラックからは動物の鳴き声が聞こえた。駒田は慎重にバラック内部の様子を窺った。そしてそこに動物と中年の男しかいないことを確かめ、がたつく木戸を開けて中に入った。

「こんばんわ」

犬に餌をやっていた中年の男はぎよつとして振り返った。帽子を脱いだ頭は肉色の皮膚がむき出しに光っていた。白髪が多い眉毛の下に、不安そうな細い目があった。年齢は駒田より一回り上くらいだろうが、

「心配するな、警察のもんじやない」駒田隼人はなるだけ優しい声でそう言った。

「しかし、ことと次第によつちや通報しないでもない。そのへんは話し合いだ、わかるだろう？」

「あんた、なんにもんだ」

男は低い声で問うた。

「ペット探しを依頼された探偵だ。あんたを捕まえるのはオレの仕事じやない。オレは、依頼人の犬猫さえ戻ればそれでいいんだ、これから先もあんたを訴えるつもりはない。それどころか、あんたが協力してくればマージンを払ってもいい」

「……」

「ここにリストがある。このうち半分でもいい、返してくれたら一匹につき五千円払おう。今後、うちに依頼があった時にはすぐにあんたに連絡する、共存共栄というじやないか」

駒田の言葉を聞いて、中年男はしばらくポカンとしていたが、やがて低く笑った。

「あんた、なかなか利口だな、言いたいことはよく分かった。……だがな……」

男は低く続けた。

「あたしはもうこの仕事やめようと思ってるんだ。ななに、良心がとがめるとかい

「……」

今度は駒田が黙る番だった。中年男は問はず語りに自分が『犬盗り団』に入った顛末を話し始めた。

定年を目の前にして男が勤めていた草加の食品会社が倒産した。男は求人誌に掲載されている募集広告に片端から応募して、やつとある会社に仮採用された。それはペットの輸送を専門にする会社で、最初はふつうの輸送業務だった。そこで真面目さを認められた男は、本採用になるとともに「回収部門」に回された。それが今の仕事だ。

「いいか、変な情け心は持つな」部長を名乗る目つきの悪い社員が命令した。

「商品を配達し、また回収して売る、これは高度なりサイクルだ。本来、犬猫は自由で、どこでどう生きるかはやつらの勝手だ。俺たちはやつらを自由にしてやるんだ」

部長はそんな屁理屈を得意げに語った。そして教えられたのは『ダルメシアン十五万、チワワ二〇万、フレンチブルドッグ二五万、豆柴二〇万』という相場と、睡眠薬入りカプセルの入ったソーセイジやマタタビを使った「回収技」だった。「おれたちにとつちや犬猫は飯の種だ。犬を見たら札束

も言われた。回収した犬猫を同じ場所で売ることではできないので、動物は各地で交換された。地域を一周すると今度は名古屋や大阪といった遠隔地に送られ、彼らの錬金術の道具にされるのだった。

「しかしそれも、もう終わりさ」男は続けた。

「この前回収した犬にGPS発信機が付いていたんだ。すぐ気が付いて外したからよかったようなものの、あのままセンターに持っていったらアウトだよ。もうじき、みんなそうなる。動物は皮膚の下に超小型の発信機を付けるようになるんだ……犬猫は自由な動物たちゆう常識を逆手にとつてやってきた商売だけど、みんな気が付いたんさ、犬猫は財産なんだって」

話し終えて男はため息をついた。そして言った。「あたしもほつとしてるんだ」

駒田隼人は倉庫に「回収」されていたミニチュアピンシャーなど五匹を回収し、依頼者に喜ばれるとともに高額の報酬を得た。会社は潤ったが、もう一度とぞういうおいしい仕事は来ないだろうと思つとちよつと残念でもあった。

中井君と出会った頃 (二) 瀧本文彦

転校生の彼は、前に通っていた尾鷲高校での恩師・佐藤幸平先生を尊敬している様子だった。佐藤先生はピアノ演奏が巧みな上、音楽理論に詳しい数学の先生で、今は東大の計数工学科で助手として

数理の研究をしているとのことだった。二度、佐藤先生のピアノを瀧本君にも聴かせたい」

とも言った。これは後年、表現した。何と言っているのか、一音入魂とでも言っ

か、気迫のひしひしと伝わってくる個性豊かな演奏だった。私の知らなかったその曲は「ハイドンやモーツァルトと同時に代の作曲家の書いたものです」と言われた。一生忘れられない演奏である。

中井君と付き合い始めた頃、私は学校の図書室で作曲家の伝記を読んでいた。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、

シューベルト、シューマン、ショパン、

ベルリオーズ、ムソルグスキー、ベルディの伝記を読んだ。作曲するためには何を勉強すればよいか知りたかったからである。ベルリオーズを除いて、他の作曲家は全員ピアノを習っている。それでもピアノを始めた訳だ。

伝記を読んでいたために、ベートーヴェンがゲーテに尊大不遜な態度をとったのだ、シューマンはライン川に身を投げ、船頭に助けられ、その後、精神病院に入ったのだ、シューベルトは背が低く極端な恥ずかしがり家で、尊敬しているベートーヴェンの家の前まで行ったが、会う勇気がなくて帰ってしまったのだ、ショパンは結核でジョルジュ・サンドの紐だったのだ、中井君に会うと、こういう話を続けたので、彼は、「そういう話は逸話だろう。君自身の考えを聞きたい」

と言った。

私は諸井三郎の『機能と声学』上下巻のうち、上巻を読み始めたばかりだったので、彼の興味を惹きそうな音楽理論の話もできなかった。しかし、このようなことを問いかけてくれる友人は他にいなかった。

中井君とは会うたびにクラシック音楽や絵画や読んだ本の話をした。音楽を通しての付き合いから、だんだんと絵画や文学や哲学書の話にまで自然に進んでいった——というより、僕が彼に引張られていったのである。

彼が本の話をする時、僕はその本を買いに本屋へ走った。岡潔と小林秀雄の対談『人間の建設』という本を見つけて買ったこともある。

岡潔先生はゴムの長靴を履き、本を風呂敷に包んで大学へ出勤しているという話を中井君に聞いた。長靴は頭によく、革靴は頭に響いてよくないそうだと聞いていた。頭脳を酷使する数学者はそこまで脳に気を配っているのか、と思った。それにしても変わった学者だなとも思った。

ある日、彼は樋口一葉の文庫本を持って僕の家に来た。あるページを指して、「この文章が何とも言い難い味わいのある文章だ」と言った。

僕は横からその文章をチラッと読んだ。下町の人情味ある会話の部分だったように思う。『にこりえ』だったと思う。

《なるほど、小説の文章というのは、ただ物語を辿って読むのではなく、それぞれの文章に魅力があり、味わって読むべきだな》と、その時に思った。

それまでに僕が読んだ本といえば、フーブルの『昆虫記』一冊だった。中学生の時に読んだのだった。書かれた昆虫の世界が面白いと同時に、フーブルが草原に一日中腹這いになって、あらゆる角度から昆虫を観察している。その根気愛情に感動した。フーブルが科学者の目で虫を追う時、彼の目は昆虫のように複眼になっていたに違いない。そして、昆虫に注ぐ愛情がすばらしい文章を生んだのだろう。

高校の国語の教科書に芥川龍之介の『鼻』という作品があった。これを授業で習った。面白くて滑稽で、ちよつと悲

しくもある内容だった。味わい深い文章だな、と思った。それから芥川の文章を読み耽った。

知らない漢字や、意味の分からない言葉に行き当たると辞書を引き、悪戦苦闘しながら読んだ。『羅生門』『地獄変』『偷盗』『蜘蛛の糸』『杜子春』『河童』『或る阿呆の一生』『侏儒の言葉』など、読み進むうちに身が引き締まった。神経のかよった鋭い文章だな、と思った。中井君に出会わなかったら、『鼻』だけで終わったかも知れない。

学校の図書室にもよく行った。『ランボー詩集』が目に入った。ランボーという名前が先ず気に入った。詩集をバラバラめくると、『酔いどれ船』という詩が目にとまった。題がよかった。読んでみて、何とも言えぬ開放感が残った。それまで読んだことのない、反抗と放浪の詩だった。僕は学校や家庭から解放されたような気分を味わった。この詩人は、歩行者ランボー』と言われるほど街中を歩き回り、詩の言葉を拾い、そのうちアフリカまで行ってしまった。

僕は中井君とよく歩き回った。古座の町の中、海岸線、山道と。中井君はあつ

ちこつち歩く生徒だった。僕はその後について行ったのだが、あまりよく歩き回るので、谷古座高校のアルチュール・ランボーだな』と思つたものである。その頃の彼の性癖が、現在の登山趣味につながっているような気がしてならない。

(つづく)



本

中井 豊

幼稚園では毎月『キンダーブック』(フ

レーベル館)というB5サイズの絵本が配られた。幼稚園での集団行動に適応できなかつた私も、この本をもらうことは楽しみだった。今もその数冊は大切にしているが、絵にも文にも子供に対する暖かい配慮があふれている。

生まれて初めて買った本は山川惣治作/画『少年ケニヤ』(産業経済新聞社の最終巻だと思ふ。ハード・カヴァーの変形版だった。大蛇ターナがとぐろを巻いた前で酋長ゼガが手を振ってワタル少年に別れを告げる姿が最後のページだった。確か、小学校へ入る年の正月、訪れた祖母にお年玉をもらい、駅前の本屋さんへ走って買った。本屋さんといっても、田舎のことで、「何でも屋」さんのような店だ。親切にも、店のお兄さんは、

「ちよつと難しいのでは？」

と言つてくれたことを憶えている。

その春休みに父と天王寺動物園へ行った帰りらしいのだが、『冒険王』(四月号?)という漫画雑誌を買ってもらつた。動物園は全く記憶にないのに、この雑誌に手塚治虫の『孫悟空』があつたことは確かだ。場面からして、連載第一回だった。帰りの電車で後向きに坐つて読みつけた。

小学校二、三年の頃の記憶をたどると、木造一階建ての図書室が目につかぶ。伝記漫画シリーズのようなハード・カヴァーの本の棚から、『千代乃山』『金田正一』といったものを好んで読んだ。お決まりの『野口英世』などもあつた筈だが、思い出せない。

小学校に隣接して、町立図書館があつた。瘦せて小柄なゴマ塩頭のお爺さんが眼鏡をかけ、腕カヴァーをしてカウンタ―に坐つていた。(ここ)で、『大西長シエ

『ロニモ』などの西部劇、『宇宙から来た少年』などのSFを日に二、三冊づつ借りて読んだ。ポプラ社とか偕成社とかのシリーズだった。読みたくなる新しい本を毎月のように見つけることができた。

図書館のお爺さんはニコリともせず、頑固で意地悪そうにしか見えなかった。今になって考えると、大人の利用する町立図書館へ小学生の分際でせつせと本を借りに通つて来る子供を上目づかいにジツと見て、適切な本をどんどん購入してくれていたに違いない。

大人になってこの町を訪れた。町立図書館に入ると、何度も装丁し直した『大酋長ジエロニモ』などが、よれよれになつて並んでいた。紙も茶色に変色していた。私達が借りたきれいな新刊書が買い換えられることもなくそのまま残つてある——自分が夢中になつて読んだあの本だ、と思った。

ある日、町立図書館の前で、親友の竹中広君が自転車荷台に借りた本を三冊ばかり結わえていた。口数の少ない彼が着々と読書をしていることに脅威のようなものを感じた。後年、先生達の推薦で彼は文句なく「健康優良児」候補に

入り、私は入らなかった、その時の感じに一脈通じる。堅実な彼には到底かなわないという感じだろうか。

小学高学年になると『冒険王』『漫画王』などの漫画雑誌が全盛で、そういった雑誌を購読している同級生に借りて廻し読みしたものだ。竹内つなよしの『赤胴鈴之助』『いがり君』、手塚治虫の『鉄腕アトム』、桑田次郎の『月光仮面』などが人気だった。

自分も何かとつてもらおうと、父に言うとうと、

『少年クラブ』がいいだろう』
ということだった。

この時は何も思わなかったが、おそらく父の頭に、戦前の『少年倶楽部』があったのではないか、という気がする。創刊は一九一四年というから、父が生まれる前である。しかし、私が購読した時代の『少年クラブ』は、文章がやや多かつたものの、他の漫画雑誌と変わらない雑誌になつていったと思う。

この頃、『少年マガジン』（講談社）、『少年サンデー』（小学館）という少年週刊誌が発売された。私は『少年マガジン』を創刊号から購読した。毎号、角田じろ

うの『スポーツマン佐助』という野球漫画が楽しみだった。

叔父や叔母が来ると小遣いをもらう。その度に本を買った。江戸川乱歩の『怪人二十面相』、夏目漱石の『坊ちゃん』と『漱石全集・第一巻』（角川版）も、こうして小学生の時に買った。創元文庫の『シャーロック・ホームズの冒険』も同様で、これは初めて読んだ文庫本だった。

中学生になると、学校帰りに毎日のように本屋さん顔を出した。そして、ツケで本を買うようになった。読めもしない程度の高い本まで買った。ポナスが出ると、父が黙って支払いに行った。父の兄が、見かねて、

「ちょっと本代を減らせよ」
と言った。それでも、
「本を買うな」

とは決して言わなかった。ずつと後、就職・結婚して十年にもなるうという私に、病床で死に瀕した父が、朦朧とした意識の中で不意に、

「本、買（こ）うちゃろか」
と言った。そう聞こえた。

数年後、妻の父親も、亡くなる前に、

「君が欲しがっていた『南方熊楠全集』（平凡社）を上げるよ」
と言った。

おそらく私は本が好きである。しかし、いまだに読書家にも勉強家にもなれないのが残念である。



遙かなる戦火

内田幸彦

(一〇) 召集令

日に日に戦況が逼迫する一九四五年(昭和二〇)の六月夕方だった。何気なく戸口に立っていると、Kさんが、

「済まんが、お茶一杯よんでくれるかな」

と言った。

Kさんは永年私の家の前を通って市役所に通う五十がらみの好人物である。体は小さいが、穏やかな物言いは家柄をしのばせる温厚な人柄だ。冷めたお茶を出すと、グツと飲み干し、

「あー旨かった。助かった……」

札を言いながら、声を落として、「大きな声じゃ言えないが、時代も切迫してきたし、やることはやっついた方がいい」

と教えてくれた。多分召集令状の

ことだと私は思った。徴兵検査は略され、観閲点呼を済ませたから、いつ召集令が来てもおかしくなかったのだ。

当時、専門学校に通っていたが、満員電車にぶら下がり、登校しても休講が多かったり、空襲警報が出て待避したり、疲れに行くようなもので、勉強できる雰囲気ではなかった。もし出征すれば、母一人——今のうちに出来るだけ側にいてやろうと、翌日から登校せずに家にいた。

今夜も大阪が空襲を受け、星の降るような凄まじい光景。やられっ放しで迎撃もしない。飛行機も高射砲もないのだ。新聞は書かないが、情勢は素人でも想像がついた。間もなく広島に、続いて長崎に新型爆弾が落ちたと新聞に出た。

八月十四日、ラヂオが、

「明日、正午に天皇陛下の重大放送があるから、お聞き逃しなく」と緊張した声で伝えた。それが終戦の詔勅だった。とうとう私は入営せずに戦争は終わった。

召集令は東京、あるいは大阪、京都、名古屋と、その地区の連隊本部から発行するものだとはかり私は思い込んでいた。

戦後数年経ってからは、Kさんの話で呑み込めた。各市町村に誰と誰がいて、その家族の内容がどうなっているか、各連隊本部に判る訳がない。事実は、各連隊本部から市町村の兵事課にその地区で何十人、何百人と選出させていたのである。

一般に「召集」と一括して言っていたが、厳密には召集令というのは、一応現役の三年を務めて満期になって一旦帰郷している予備役兵に出されるものだった。満二十才で三年間だけ入隊する新兵を現役といい、これは召集令ではなく、「入隊通知書」によった。召集令は、予備役の者に出されたのである。

時局の切迫に伴い、私は通常の現

役の兵隊検査を変更され、臨時観閲点呼というものに簡略されるものを受けた。それは身長・体重・既往症を尋ねるだけのもので、体力テストに土嚢を何回持ち上げるとい形式的なものだった。

その観閲点呼で、一五キロの土嚢が持ち上がらずヒョロついていると、執行官(陸軍少佐)から、

「貴様ツ、飯を食ってんのかッ!」

と怒鳴られた。余程

「土嚢を持てるだけ米を配給してるのかッ!」

と言いたかったが、それを言おうものなら、直ちに反戦思想者として憲兵が特高警察に逮捕される時代だった。

一九四三〜四年(昭和一八〜九)には、第三乙種まで入隊させられた。足が扁平でも悪くない限り出征したのである。

ヒカル君の冒険 8

藤川博樹

んはプロではないから自分で工夫して、これなら雨漏りがしないだろうと思っただんだ。

庭の物置小屋には、薪とかシヤベルとか、大工道具なんかが雑然と放り込まれていた。ある時、猫が入り込んで子どもを産んだ。ヒカル君が小屋の扉をそつと開けて、隙間から中を覗き込むと、真っ暗な小屋の中に、猫の黄金色の目が燃え上がっているように見えた。ヒカル君はとても怖かった。猫は大人が覗き込んでも逃げなかった。子どもが生まれたばかりだからだ。

ヒカル君が四歳のとき、お父さんが庭に山を作ってくれた。
お父さんは、会社が休みの日曜には庭でいろんなことをやった。ヒカル君の家はハルオちゃんの家とつながった二軒長屋だったけれど、庭があったんだ。その庭に、お父さんは、板切れを集めて釘を打ち、ペンキを塗って物置小屋をつくった。どういふふうに組み立てたのかヒカル君にはわからなかったけれど、ヒカル君の肩幅ぐらいの杉の板切れを、下の板に上の板が重なるように積み重ねて釘で打って、小屋の壁ができた。お父さ

ヒカル君の家の裏に、エツローちゃんが住んでいて、スコップとブリキのバケツを持ってよく遊びに来た。ヒカル君の家の庭で、地面を掘って遊んだ。遊んでいるうちに、けんかになって、エツローちゃんは泣いて帰ったが、また次の日も遊びに来た。お母さんは、あんなに大喧嘩して泣いてかえって、また次の日も朝早くからけろつとして「ヒカル君あーそーほ」とやってくるといつて笑った。
エツローちゃんと二人で、庭の西南の隅を掘っていると、黒い炭のかたまりがでてきた。家から出るゴミや木屑を燃や

して埋めたものだった。そのころはまだ市の清掃車が回ってゴミを回収していなかったもので、お父さんが庭に大きな穴を掘って、家を出る生ゴミや燃えるゴミを捨てていた。ごみがたまってきたら燃やし、土を埋め戻して、また庭の別の場所に穴を掘った。二人が見つけたのはその燃えかすだった。

エツローちゃんは急に、「こりや地獄だ」と言つて、あわててスコップで土をかけた。「ジゴク」というものが何かヒカル君にはわからなかったけれど、同じ歳のエツローちゃんがとても物知りに見えた。エツローちゃんは、いっどんな風に大人に聞かされたのか、何かとても恐ろしいものを見つけたように、顔がこわばつていて、ヒカル君にもこれがたいへんなことなのだとわかった。何か恐ろしい深淵をのぞきこんだような恐怖を感じて、ヒカル君もスコップで土をかけて穴をふさいだ。この世にはまだ知らない恐ろしいことがあるのだということ、が四歳のヒカル君にもカンでわかったんだ。

エツローちゃんの家は、ヒカル君の家から北側に少し歩いた、食用ガエルの養

殖池の向こうの竹藪の山の中にあつた。エツローちゃんの家に遊びに行つたときには、二人で家の門からつづく坂道を三輪車で転がり降りて遊んだ。ヒカル君は家に帰ってから、自分の家にも坂がほしいといつた。お父さんは、次の日曜日に、家の敷地全体から、シヤベルで少しづつ土を集めて、庭の端に大きな山をつくつた。ヒカル君の背よりも高く、とても大きな山だった。エツローちゃんとヒカル君は、二人で歓声を上げて三輪車で、何度も何度も滑り降りた。ヒカル君の三輪車はもうカバールも飾り紐もなく、汚れたフレームだけになっていたけれど、大活躍した。

庭にできた三角山は、ある日お父さんが少しづつシヤベルですくつてくずし、元のように庭全体に戻して、あとかたもなくなくなってしまった。灰色のペンキで塗つた物置小屋も、引越すときにお父さんが壊して、平地だけになったのをヒカル君は見た。